言葉の違和感

《言葉と表現》

◆　時代や状況・場面などによって変容する言葉や表現の在り方について思いを巡らせてみるにあたって，ネット辞書で関連の言葉について確認してみました。

《言葉》　＊人が声に出して言ったり文字に書いて表したりする，意味のある表現。　＊音声や文字によって人の感情

　　　　　　　・思想を伝える表現法。言語。　＊文の構成要素をなす部分。単語。また、語句。　など

《言語》　＊音声や文字によって，人の意志・思想・感情などの情報を表現・伝達する，または受け入れ，理解する

ための約束・規則。　など

《用語》　＊使用されている字句や言葉。特に、ある特定の分野で用いられる言葉。　など

《表現》　＊心理的，感情的，精神的などの内面的なものを，外面的，感性的形象として客観化すること。　など

◆　こうした説明に違和感はなく，「言葉の違和感」についての気付きを述べるにあたっても，これらの言葉の概念を前提にできると思います。

《時代などによる言葉の変容》

◆　時間幅を少し長く捉えてみると，日本的な文化・政治などの形成段階と一体的に日本語が形成され，時代の変化，状況の変化とともに変容し，様々な変遷を経てきて今の言葉・用語・表現等が形成されてきたものと捉えられます。とすると，「今」の段階においても変容しているのは自明の理であり，今後とも変容し続けることも必然だと言えます。現代という「歴史的には極めて短時間」の期間において，「正しい日本語」を設定したり考えたりすること自体に微妙な要素がたくさん含まれていて，私見では，言葉は時代の変化，状況の変化とともに変容すること自体が「事実としての基本事項」だと思っています。

◆　「今」を生きている私たちにとっての言葉は，成長過程の中で無意識的に，また，意識的に身に付けてきたものであり，いったん獲得してしまうとそれが前提となり，更新したり変容対応したりすることは容易なことではなくて，《伝統・文化は本質的に保守的である》という捉え方の一つの要素にもなっているものと思っています。言語獲得が個人としての成長過程と一体的であることから，世代的に共通言語的な要素が働くことになり，世代が大きく異なる場合ではその言葉感覚に大きな違いが生じることになり，時代自体の変化のスピードが歴史的に今までにない状況となっている現代においては，私たちの世代には「今の日本語」としての妥当な言葉・用い方なのか理解できないような《質的ギャップ》に遭遇することが当たり前のようになっている状況だと思っています。

◆　また，学校における教育活動も言葉を中心とした活動であることから《本質的な保守性》を有している面と，次の時代を担う若者が「教育の主体」であり，その若者を育てる面からの革新性・新規性の面とが両存していると思っています。学校や教育に直接関わっている人は，こうした両面が同存していることを理解しておくことは大事なことだと思っています。こうしたことなどを前提としながらも，私が退職間際の頃に感じた《言葉の違和感》について取り上げてみることとします。

《違和感を持った事例》

**《事例A》**

▽学校関係者だけではなくテレビの様々な場面や種々の会議などの場面でも話し手や司会者が，まさに今予定されている事実案件の紹介や進行確認の時などに，「では，会議を始めたいと思います」などど《思います》という語を付けることへの違和感が，ずっとありました。

▽教員の規模の大きな会議や行事の場面だけでなく，日常的な授業の場面でも「思う」という場面ではない時に語尾に「思います」を付ける教員は多くいたように思います。私は，まさに個人的に「思っていること」を述べる時以外は基本的に不要だと思っていて，「会議を始めます。」「説明を行います。」「ご意見を聞いてみます。」など行動事実が予定されている場面では，不要だと思っています。発言者がまさに「思っていること」を周囲に述べているのか，周囲も共有している状況・事態の中での役割として言葉を発しているのかの場面把握の違いだと言えます。

▽こうした表現が広まっているのは，私見では，①学校での学習成長過程で，学級の人などに自分の意見等を発表する場面で，「私は，・・・だと思います。」の言い回しが身についていること，　②断定的な表現を避けて批判を受けないようにする傾向，　③「思います。」の語尾を付けることがより丁寧な印象を与えるとの思い込みなどが理由と考えられる思います。

▽牽強付会になるかとも思いますが，「そのことは，直近の行動予定も含めた《共有されている事実》に属することなのか，発言者が《思っている》ことなのかの違い」には，明確なものがあるように思っています。場面によっては「認識違い」に繋がることもあり得るように思っていて，授業などで教員として生徒に説明する場面などでは，明確な使い分けの意識を持つことを望みたいものです。

▽今の使用度から思いを広げるとそのうちに，「ただいまより，○○高等学校第○回卒業証書授与式を始めたいと思います。」という開式の言葉になるかも知れませんですが・・・

**《事例B》**

▽生徒が企画したり担ったりする種々の行事の場面，例えば，中学生向けのオープンスクールで進行役・説明役の生徒，文化祭の企画パフォーマンスの場面で生徒会役員の進行役・説明役の生徒の舞台での挨拶などで，自分たちが行ったことについての感想を話の展開の前振り的に中学生や役員でない生徒に対して「○○は，どうでしたかあ？」などと求めて，少し間を取ることをよく目にしていて，違和感を覚えていましたが，その違和感の理由・根拠的なものは漠然としたものでしたし，今でも明確なことは説明できない状況です。

▽説明役が期待していたのは「良かったよ～」とかの反応や拍手などの反応だったかも知れないとも思いますし，反応を問い掛けるのが「演示者側のマナー」だと思い込んでいたのかもしれませんが，そのように捉えたとしても，私の覚えた違和感は解消されないように思います。

▽もしかすると，《場面把握のズレ・思い違い》が説明役の当該生徒たちに働いていた可能性もあるのではなかろうかと思います。場面としては，中学生や他の生徒たちは，そのパフォーマンスを主たる目的としてその場に参加しているのではないことの捉え違えが働いていて，説明役・進行役・本部役員が舞台上にいることで「自分たちが主役」だとの捉えをしていた可能性も考えられます。「舞台を楽しみに集まって観る側」とその期待に応えるべく「演じる側」との間に働く《舞台性》は，学校内のこうした行事（高校生と中学生の関係性，同じ学校の生徒会役員とその他の生徒の関係性でしかない状況）では働かないのが通常だと思っています。《演じる側と観客との舞台性》が成り立つには，（例えば，お金を払ってでも集まる）観客の特別な期待が前提にあるとか，演じる側の（人を魅了するような）特別なパフォーマンス性が必要なのではなかろうかと思っています。

**《事例C》**

▽授業の場面で，教員が生徒を指名・発問して，それに生徒が応答・説明等を行った時に，教員が「ありがとうございました。」と丁寧な反応をするのに接した時や，授業中に生徒に活動等を指示する場面で，「・・・していただきます。」と丁寧な「依頼・お願い」までの印象を受ける表現に接した時や，行事や研修会などで外部の人に説明している場面で，司会役・進行役（生徒・教員）が，その場面で生徒・教員が役割担当として行った説明やパフォーマンスについて，一つ一つ「ありがとうございました。」などの丁寧な表現をすることに接したときなどにも違和感を覚えました。

▽印象的には，概ね若い層の教員や生徒の発言だったように思っていますが，私が覚えた違和感の背景にあることは，《場面・状況の踏まえ方と発言者の立ち位置の把握》とその場面に応じた「表現の仕方，姿勢の在り方（誰と向き合っているのか）」が噛み合っていないことがあるように思います。こうした場面では，場面における「内と外」の関係性の理解，説明者と受け手との関係性の理解が重要になります。

▽授業の場面での教員の言葉が，ぞんざいであったり命令口調であったりすることは不適切の範疇に入るくらいのことだと思いますし，生徒の人格を前提とした丁寧な対応・言葉遣いは必要なことで大事なことだと思っていますが，授業の場面としての「教師と生徒の関係性」の構図として求められる対応・言葉遣いを越えるまでの気配りは，むしろ「慇懃無礼」と同じように，《場面・状況の捉え違い》になることと思っています。そして，「教師と生徒の関係性」の単線的な構図だけでなく，生徒個人に重きがある場合と生徒全員に重きがある場合などの相違と教員の言葉表現の在り方の相違なども，場面構図としては大事なことのように思います。

▽授業における「教師と生徒の関係性」の捉え方については，新学習指導要領の全面実施となるこのタイミングで捉え直しておくことが必要だと思いますし，



その前提となる授業の在り方そのもの

が右に模式図的に示しているように，

まさに《本質的な変容》の局面を迎え

ていると思っています。こうした図式化

を試みたからといって，現場の授業で

の相応しい言葉の前段整理になると

までは思いませんが，これからの授業

の姿を模索し続けることと教師として

相応しい言葉を練り続けることは大事

なことだと思っています。

▽そうしたことを踏まえつつ，教育活動

の様々な場面において，教師が「どの

ような表現・言い回し」で生徒に考えさせたり，発言を促したり，場の進行を進めたりすることができるようになるかが大事になると思っています。

《まとめ的に》

◆　古い世代に属する私の語感的なことも手伝って，今の状況で使われている言葉について，様々な折に違和感を覚えていますが，時代・状況の変化とともに言葉も変容していくことを前提としつつも，学校・教育の世界で教師や生徒の関係性においてどの程度の水準の言葉使用や表現が行われることが《生徒の学びと成長》としてより良いのかを考えてみることは大事なことだと思います。

◆　さらには，言葉遣い・表現の範疇のことだけでなく，その前提となる場面・状況そのものの捉え方も重要な要素であり，《場面把握力・状況把握力・文脈理解力》や《コミュニケーション力・対話力・対人対応力》などと呼ばれる資質・能力を高めておくことが授業力・指導力の向上には必須要件だと言えると思っています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（令和３年7月20日）